

## 教父における「愛智の新しい誕生」

谷 隆一郎

教父の文脈、とりわけニュッサのグレゴリオスや証聖者マクシモスの文脈に親しんでいると、「愛智（ピロソピア）の新しい誕生」とも言うべきことを強く感じさせられる。そしてそれは、聖書にある「新しい創造」という表現をおのずと想起させるのである。

従来、教父の伝統は「キリスト教のヘレニズム化」とか「プラトニズム」とかいった標語で特徴づけられることが多く、それはそれで間違いではないのだが、恐らく教父たち自身は決してそうした言葉で自らの道の全体を語ろうとはしないであろう。もとより、教父の伝統の主流が古代ギリシア的な伝統を（ストア派やネオ・プラトニズムも含めて）大きく摂取していったことは言うまでもない。が、教父たちが真に心砕いて祈りかつ思索した中心の一点に関する限り、そこには、ヘレニズム化とかプ

ラトニズムといった一般的な言葉によってはおおい切れぬ問題位相が開かれていたこともまた、厳然たる事実であろう。すなわち、くだんの教父の文脈にあって顕著なのは、ロゴス・キリストの受肉なら受肉といったいわゆる教理の問題が、まさに愛智の道行きの要として吟味・探究されていることである。実際そこでは、われわれにとつての「存在」や「自然・本性（ピュシス）」が、受肉（神性と人性との不可思議な結合）という究極の目的に定位されたものとして捉えられていた。そのことからして、われわれの本来の道行きの全体は、無限なるもの（神性ないし善性）にどこまでも開かれゆく動性、あるいはいわば存在論的ダイナミズムという性格を有することになる。それゆえ教父にあっては、無限性、意志、自己、時間、そして身体（肉体）等々が主題化してくるが——それらはいずれも古代ギリシアではやや影の薄い言葉であった——、そのことは愛智の基本的動向の一つの大きな変容・展開をしるしづけるものと考えられよう。

ただそれにしても、西欧にあって今日なおも、後期スコラ及び近代以降の学的枠組として神学と哲学、信と知などの領域分化が当然のことと看做されているふしがあり、さらには古典文献学・実証学という要素への解体を旨とする手法をよしとしているためか、教父の伝統を（そこにおいて用いられている個々の要素・表現を遙かに超えて）、古代ギリシア的伝統と対峙するすぐれて一つの愛智（＝哲学）のかたちとして、その文脈の内側から読み解くことがむづかしくなっている場合があるろう。しかし教父たちにあつてロゴスの受肉とは、必ずしも天降りの教理として祭り上げておくべきものでは

なく、むしろ人間ないし人間的・本性の意味（志向）とその成りゆくべき究極の位相に密接に触れてくるものであった。この意味で受肉の教理なるものは、神性と人性との何らかの結合の仕方を合理的な知・限定に解消することを徹底して拒み、ただ人が人として真に生きるかたちを、そして無限なる超越に開かれたその場を守るものであったことが忘れられてはなるまい。

ともあれ教父の伝統に対しては、ありきたりのキリスト教理解のもとでそれを殊更に退けたり、あるいは逆に、いたずらにそこに閉じこもりたりしてはならないであろう。それはたとえば東洋における大乘仏典成立の歴史に比すべく、およそ道を求めるすべての人々にとって、後世の容易に凌駕しがたい源泉であり、倣いゆくべき生の範型を宿しているものだと思われる。そして不思議なことに、学と修道とが渾然と一体化した教父たちの言葉に耳傾けてゆくとき、そこには、西洋と東洋、キリスト教や仏教などの通常の枠組を遙かに超えて、たとえば空海や道元といった我が国の先哲とも、少なくともその生の道行きの透徹した姿において、微妙に呼応するものが感じられるのである。